

CONTENTS

P1 巻頭言 遠隔授業の令和2年

理事(教育・広報担当)・副学長 根上 生也

P2 遠隔授業の好事例集

P9 遠隔授業に対する本学学生からの声 コロナ禍転じて福と為す

都市科学部2年 長 洋平

P11 大学教育の質保証⑤ 双方向ライブ型授業で「対面性」を追求する
大学院教育強化推進センター/高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

P13 CENTER NEWS



コロナ禍の一年を振り返って

教育広報担当理事・副学長 根上 生也



ようやく遠隔授業中心の授業が対面授業中心に戻ろうとしています。思い返せば、2020年の4月7日に第1回目の緊急事態宣言が発令されることが明らかになった直後から、本学は急ピッチで5月7日から始まる春学期の準備を進めました。危機管理警戒本部がコロナ対策を検討するのと並行して、私は「遠隔授業WG」を結成し、本学の遠隔授業全体をどのように動かしていくかを立案していきました。あのイラスト入りの「遠隔授業の手引き」を作成し、配布してきたのはこのWGです。

本学の授業支援システムや学務情報システムを活用したアンケートを通して学生のみなさんの動向はそれなりに把握していました。マスクミでは生活に困窮する大学生のことが報じられ、遠隔授業の悪影響ばかりが強調されていたようですが、本学では課題に苦しむ人はいるものの、本学が講じた支援のおかげか、困窮している人はそれほど多くありませんでした。なかには遠隔授業を楽しんでいる人たちもたくさんいたようです。

学生さんたちの努力もさることながら、遠隔授業の準備に尽力していた教員のみなさんの努力も忘れることはできません。従来の授業を遠隔授業として実現するにはどうするかと苦慮された先生もたくさんいましたが、遠隔授業の準備をする過程でこれまでの授業のあり方を振り返り、遠隔授業ならではの授業方法があることに目覚めて、様々な工夫を試みた先生もたくさんいました。それはZOOMの使い方がどうのということではありません。講義内容の提示方法や学生とのコミュニケーションの取

り方などの工夫です。それによって従来の対面授業に対する改善の視点も得られたことでしょう。

たとえば、障がい学生への支援の在り方は従来と異なりました。聴覚に障がいのある学生さんにはロジャーマイクやノートテイクなどの支援策がありますが、オンデマンドの授業ではあらかじめ講義を録画したものに字幕をつけて提供することができました。また、電子的に用意された資料が受講生に配布されるのであれば、わざわざ板書をノートにとる必要もありません。

こう考えていくと、近い将来に新型コロナウイルス感染の問題が解消したからといって、授業をもとのとおりに戻す必要はないように思えてきます。このコロナ禍の一年間に得られた授業改善の知見に基づいて、新しい授業運営の在り方を創造した方がよいにちがいません。以前と同様の講義を対面で行うにしても、授業支援システムを学生と先生のコミュニケーションの窓口として利用した方がよいし、基礎知識の提供を目的にした授業ならば楽しく講義できる先生の講義の録画を共有した方がよいし、学生のみなさんが自分のPCを携帯していることを前提に自由に学務情報にアクセスできる仕組みを作った方がよいし…。そういうことを全部考え合わせて「YNUスマートキャンパス」を構想するとよいのだと思います。

そもそも「コロナ」とは皆既日食のときに太陽の周りにできる光の輪のことです。天照大御神が岩戸屋から出てきた後の世界を早く見たいですね。

遠隔授業の好事例集

新型コロナウイルス感染症の影響により遠隔授業となった2020年度。次年度は感染防止対策を講じて学内の安全・安心な環境を整えた上で、可能な限り対面授業を実施することになりましたが、本学に限らず、今後の大学教育の流れとして、対面とオンラインの学習活動を効果的に組み合わせた「ブレンディッド（もしくはハイブリッド）教育」が主流になることは間違いのないでしょう。そう考えた時、2020年度の遠隔授業で作成したコンテンツや知見・経験を、今後の授業に活かさない手はありません。

そこで、今年度開講された遠隔授業の中で、特に「学生による授業アンケート」における満足度の平均値が（全学平均よりも）高かった科目、もしくは同僚教員から「魅力的な授業」として推薦された科目を“グッド・プラクティス”（好事例）として以下にご紹介させていただきますので、先生方におかれましては、次年度以降の授業づくりのご参考にしていただければ幸いです。

Good Practice Case 1

奥村 綱雄教授

国際社会科学研究院 国際社会科学部門
（研究分野：計量経済学、金融、マクロ経済学）

●科目名

金融論

●履修人数

139名

●授業タイプ

講義資料と授業の録音ファイルを事前に提示し、当日はZoomで授業、授業後に小テストを行いました。具体的には、

- ①「講義資料」と、授業を録音した「音声ファイル」を、授業の2日前までに授業支援システムにアップし、受講生に学習してもらいました。
- ②授業はZoomを介して行いました。受講生の質問はチャット機能で受け付け、回答し議論しました。
- ③授業時間の最後に、「小テスト」を授業支援システムに掲示し、受講生は回答しました。

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

- (1) 授業時間にZoomで参加できる人と、できない人、双方が学習できるように、上記授業の進め方の①と②を併用しました。①と②は基本的には同じ内容です。ただし、授業では（録音テープを流すのではなく）ライブで講義しました。随時、資料映像を提示しました。授業アンケートへの記述回答によれば、録音テープを予習した上でZoom授業も受講した人も多かったようです。例えば、「Zoomでの対面補講に加え、事前の資料や音声データの提供までであったので、非常に学習しやすかった。」「資料に加えて、音声ファイルもあったので、一人でも学習しやすかった。分からない点があればZoomを介した授業で質問できた。」等のコメントがありました。
- (2) Zoom授業では、受講生が孤独感を感じないように、質問を受け付け、丁寧に議論し回答しました。事前に講義資料をアップしたことと、チャット機能で質問を受け付けたことにより、通常の対面授業の時より多くの質問を受けることができました。実際の質疑の流れは、まず私が、チャット機能で出された質問を読み上げ（質問者の名前は出さず）、質問に回答しました。そして、質問の意図や背景を想像し、それに関連する項目・内容を追加説明しました。それに続いて、別の受講生から追加説明に対する質問がチャットで出され、私が回答し説明する。このように連鎖する形で、受講生の皆さんと議論ができました。
- (3) 受講生の学習ペースを守っていくように、毎回、「小テスト」を出しました（最終成績の30%）。授業時間にZoomで参加できない学生も考慮し、小テストの回答期間を、出題日（授業日）から試験期間までとしました。小テストの問題は、講義資料と授業を学習すれば正解できるような基本的知識を問うものになりました。

●1回あたりの学習時間の想定

授業時間として90分、授業外学習時間として90分程度（事前学習と授業後の小テスト両方を含む）。

●成績評価の方法

授業ごとの小テスト（30点）、試験期間に提出するレポート（70点）

●その他の記載

Zoomで授業を受講することは、集中力が続かない、

疲労しやすい、孤独を感じやすいように思います。その一方で、チャット機能を使うと対面授業より質問が出やすい、資料映像（金融危機のニュース映像や日本銀行オンライン見学等）を見せることができる等の良い点もあります。Zoom授業では、事前に講義資料を提示し、詰め込み授業にならないように留意し、質問への回答に時間を取り、多面的な資料を活用することにより、受講生に振り返りや反転授業といった主体的な学び方を促すことができるのではないかと感じました。

Good Practice Case 2

森田 洋教授

国際社会科学研究院 国際社会科学部門
(研究分野：金利の期間構造、資産価格理論)

●科目名

ビジネス・エコノミクス

●履修人数

418名

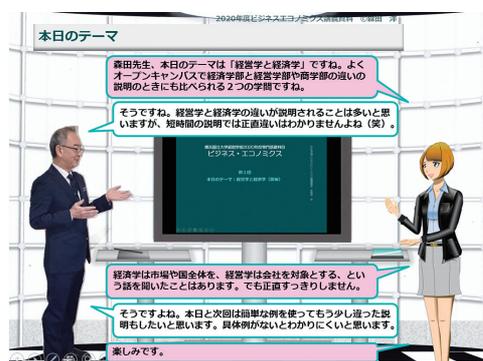
●授業タイプ

ファイル配信と課題提示

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

例年の講義において、コンテンツのみならず一人の人間としての教員によるライブトークの側面も大切に、学生との対話を重視してきました。資料配布によるオンデマンド形式を原則とする学部方針の決定後、2次元画像のVirtual Assistant（以下VA）を作成し教員とVAの会話による講義形式を考えました。

仮想研究室におけるディスプレイに例年のスライドを貼りつけ、それを挟み教員とVAの会話が進みます。教員のトークをVAが遮って質問したり、時には余談を話したりする形式としました。質問には過年度に学生から受けた質問を可能な限り反映させ、例年口頭にて伝えた理解を助けるためのくだけた表現や内容はVAのセリフに盛り込みました。



仮想研究室の様子

例年同様、各回とも3つのキーワードとともにコンテンツが3つの節で構成されることからファイルを3つに分解し、最初の2つのファイルの最終ページに理解を確認するクイズを配しました。ポイントは次のファイルを開くためには正解の文字列がパスワードとして要求されることです。

●1回あたりの学習時間の想定

資料による授業コンテンツの理解に60分程度、毎回の小テストとその復習30分程度、授業外学習時間として60分程度

●成績評価の方法

毎回の小テストの成績に50%、質問や感想による貢献に10%、定期試験40%

小テスト：水曜4限の授業終了後に受験可能となり、同じ週の金曜日の24時を提出期限としました。そして、土曜日0時から正解を公表しました。出題と答えの公表は授業支援システムを利用しました。

質問や感想：質問は授業支援システムのQ&Aで、感想は同システムの掲示板を立てフォーラム形式で記入してもらいました。質問や感想の提出は特に義務化しておらず、理解を深める重要な質問があった際には次回の講義にて、学生さんのお名前は伏せてその内容をVAが紹介し、感想も理解を助ける共有するコメントがあった時には同様に授業にてVAが報告していました。

定期試験：授業支援システムのテスト機能を利用して実行しました。選択問題のみで記述問題がなく、例年のように学生の表現力を育てることができなかったのは残念でした。主に難易度の高い択一問題や低い択一問題をちりばめたのですが、70点台後半を平均点とする比較的きれいな分布に収まりました。複合選択問題にすると途端に正解率は落ちることも分かりました。やはり、正しい選択肢や誤った選択肢を全て選ぶという問題は、考えさせるので難しくなると思います。所要時間の設定も普段の小テストの所要時間の分布を参考にして、見直しをした後にも大きな余裕が生じることのない程度にしましたが完答できなかった学生はほとんどいなかったと思います。

●その他の記載

パスワードにより次のファイルを開くことができたときに、学生はクイズに正解したことによる学ぶ実感が得られるようです。また講義後の感想や質問のうち、重要なものは次回のVAのセリフに反映させ、学生はVAからのフィードバックを楽しむと同時に授業への貢献も実感したようです。「VAの絶妙な補足で助かっているので今後もよろしくお願ひしますとお伝えください」といった感想もありました。ただ対話形式よりも通常のスライドの方が資料として読みやすいという感想もあり、秋学期の授業では例年の講義スライドのファイルを事前に配布しそれと今回の会話形式のファイルを併用して学ぶ形としました。

Good Practice Case 3

尾島 司郎准教授

教育学部 学校教育課程 英語教育

(研究分野：第二言語習得、臨界期、言語脳科学)

●科目名

初等教科教育法（英語）

●履修人数

春学期・秋学期のそれぞれで約120人

●授業タイプ

オンデマンド動画配信+Zoomライブ授業のハイブリッド型。講義内容はオンデマンド動画で説明しておき、その内容を踏まえてZoomライブ授業のブレイクアウトルーム内で議論させるスタイルを採用した。オンデマンド動画を見てないとライブ授業の議論には参加が難しく、また、教員はライブ授業内では説明する役ではなく、交流を促す役を担った。

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

行った工夫の中でも、学生から反応が良かったものを述べる。

- ・YouTubeからの配信：大学が提供しているものも含めて幾つか動画配信プラットフォームを試したが、ユーザーである学生にとって最も使いやすく親しみがあるYouTubeから配信することにした。YouTubeからの授業配信自体は3年以上前から別の授業で行っていたので、その経験が活きた。
- ・対面授業を意識した交流：Zoomを用いたライブ授業は交流セッションとして位置づけ、対面授業で自然に起こる交流に近づけるように工夫した。具体的には、ブレイクアウトルームのグループ分けで毎回好きな人と一緒になれる仕組みを採用し（対面授業で仲の良い友達と座るイメージ）、授業の初めには雑談のためだけのブレイクアウトセッションを設けた。
- ・シンプルな授業構成：オンラインの場合、授業のやり方が頻繁に変わると学生が混乱しやすいことに気付いたので、なるべくシンプルな授業構成にして、毎週やることを同じに保った。月曜日から水曜日を動画視聴するインプットの時間、木曜日を授業に出て交流するインタラクションの時間、金曜日から日曜日をレポートを書くアウトプットの時間とし、レポート課題は毎回3問で固定した。
- ・受講形態の自由度：木曜5限という、学生にとっては出席しやすいとは言えない時間帯に設定されている授業である。コロナでアルバイトの機会が減っていること、サークル活動を通じた交流の機会が減っていること、ネット接続やパソコンのトラブルが誰にでも起こり得ることを考慮し、出席は取らず、実質的には完全

オンデマンド型授業としても履修できるようにした。

●1回あたりの学習時間の想定

オンデマンド動画視聴45分、Zoomライブ授業75分（講義部分がないので短めに設定）、レポート作成60分

●成績評価の方法

毎回のレポート課題をもとに評価

Good Practice Case 4

市毛 弘一教授

工学研究院 知的構造の創生部門

(研究分野：デジタル信号処理、移動体通信、画像処理)

●科目名

回路解析（理工学部 電子情報システムEP2年次生向け、春学期開講）

●履修人数

120人

●授業タイプ

オンデマンド配信（パワーポイントスライド+音声）別途、穴埋め式の講義ノートを配布。スライドの解説を参照しながらノートに記入する形式。

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

- ・対面授業と同じ形式／雰囲気を提供する
2019年度の対面授業では、穴埋め式の講義ノートを配布して、空欄や補足事項は板書していた。2020年度のオンライン授業では、講義ノートは前年度と同じものを使用して、板書していた内容をスライドにまとめた。他の講義ではスライドを見るだけのものが多かったのか、ノートをとらせる形式が意外と好評だった。
- ・凝った作りにしない、シンプルに
動画やアニメーションが多いと疲れるだろうと予想し、アニメーションなしのシンプルなスライドを使用した。また、パワーポイントのプレゼンテーション(ppsx)形式に加えて、スライドpdfファイル+音声mp3ファイルの形式でも解説資料を配布した。この場合、ノートとスライドを印刷して、PCの画面を見ずに説明を聞くことも可能であり、こちらをダウンロードする学生も多かった（全体の3～4割程度）。
- ・休憩時間を設ける
解説スライドの途中で毎回1枚、休憩スライド（趣味の海外旅行やフルマラソンの話など、3分程度）を設けた。予想外に好評だった。
- 1回あたりの学習時間の想定
各回90分を想定して組み立てた（解説スライド10～12枚、録音した音声50～60分。ノートをとりつつ解説を聞くので70～80分ほど要したと思われる。その後、10～15

分程度で解ける簡単な練習問題を解いて提出させた)。授業アンケートでの学生の回答を見ると、解説を繰り返し聞くのか、所要2～3時間と回答した学生も多かった。

●成績評価の方法

期末テストは公平性が担保できないと考えて実施をとりやめて、代わりに期末レポートを提出させた。毎回の練習問題と期末レポートの採点結果をもとに成績を評価した。ここはもう少し上手い方法があったかも知れない。

●履修人数

62名

●授業タイプ

資料（音声ファイルとスライド資料）・課題提示。音声についてはPowerPointファイルをMP3ファイルにし、スライド資料と分けて授業支援システムにアップロードしました。また、課題についても別個でPowerPointによるスライド資料としてアップロードしました。

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

対面の授業で行われていることを遠隔でも行えるように最大限努力しました。基本的に毎回課題を提出してもらうことにして、その際に授業で分からなかったことがあれば何でも質問してもらうようにしました。そして次の授業で受講生の質問に全て答える形をとることで質問をすることに対するハードルを下げることを目指しました。その結果質問の数が増えていったので全ての質問に音声で答える時間は無くなってしまいましたが、重要な質問に関しては音声で対応し、それ以外はスライド資料で文章で説明しました。

また、従来であれば、図書館で調べたりしてもらうような課題が多かったですが、今回は難しかったので、インターネットで調べて書くことができるような課題の作成を行い、また講評も毎回行うようにしました。

●1回あたりの学習時間の想定

授業時間として60分から75分、授業時間外学習として15分から30分

●成績評価の方法

平常点（出席回数）と毎週の小課題、最終課題で評価しました。

●その他の記載

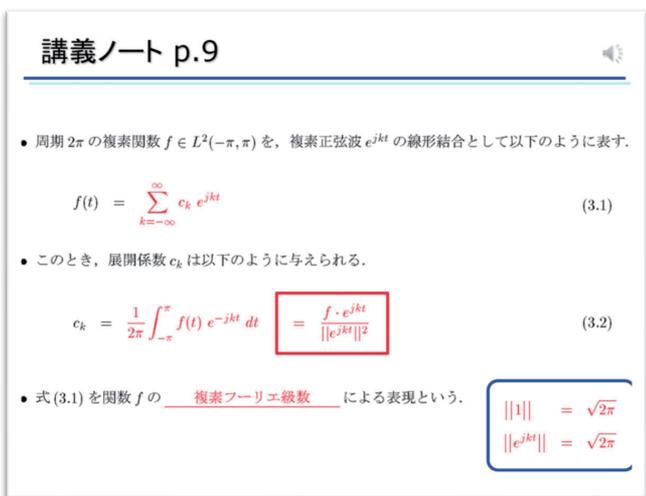
従来は出来るだけ顔と名前を覚えて、また問題関心などを把握することで、できるだけ学生に興味を持ってもらえるように授業を設計してきましたが、今回は遠隔授業であったことからそれが出来ず、なかなか難しい部分がありました。遠隔授業ではそういうデメリットはありましたが、一方で、分かりやすい説明を目指して一つのスライドに何回も音声を吹き込みなおしたりすることを通して、改めて自分の授業を見つめなおすいい機会にもなりました。

最後に、授業アンケートにおける受講生からの声（自由記述）の一部をご紹介します。

- ・毎回質問にきちんと答えてくださってありがたかったです。
- ・毎週のリアクションペーパーに対する回答の資料や音声があったので、一方通行で終わらない「対話」的なものも可能であったところが良かった。
- ・ただ資料を提供されるよりも、先生の肉声の音声と合わせて学習することでより理解度が深まったと思う。
- ・パワポに音声がついているものより音声とPDFばら



講義ノート例



解説スライド例

Good Practice Case 5

三浦 倫平准教授

都市イノベーション研究院 都市イノベーション部門
(研究分野：都市社会学、地域社会学)

●科目名

格差社会と社会的包摂講義

ばらのほうがやりやすかったのでありがたかったです。
 ・音声ファイルと授業レジュメを利用して対面授業とほぼ同等の講義を受けられたという点で満足しています。ほかの生徒からの質問も授業内で丁寧に回答していただき、「こんな視点もあるのか」という刺激になりました。

Good Practice Case 6

田村 洋准教授

都市イノベーション研究院 都市イノベーション部門
 (研究分野: 鋼構造、破壊力学、橋梁工学、構造工学教育)

●科目名

都市基盤応用数学 I / II

●履修人数

52人/53人

●授業タイプ

オンデマンド動画配信とリアルタイムZoom授業による反転授業です。予習用として60分程度のオンデマンド動画配信（予習課題の出題含みます）と、授業時間内の予習課題の解答・解説とZoomのブレイクアウトルーム機能を用いた確認クイズを実施しました。

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

入学後間もない1年生が対象であることもあり、オンデマンド授業の強みを引き出しつつ、休み時間も含めた平時を少しでも再現できるよう心がけました。基本知識の習得はほぼすべてを動画に集約し、知識の運用を行う場は予習課題と確認クイズとしました。ブレイクアウトルーム機能を用いた確認クイズでは受講生を7名程度のグループに毎回ランダムに分け、5題程度のクイズに取り組んでもらいました。ここでは、学生が他者と解答を探る過程で自分の理解度を把握し、学生間で相互扶助が行われることを狙いました。Zoom授業は約60分以下とし、残りの時間でもブレイクアウトルームを使用し、休み時間を再現する学生のフリートークの時間としました。メインを予習と位置付けた授業ではありますが、課題の解答・解説や確認クイズを設定したことでほとんどの学生がZoom授業にも参加していました。予習については毎回A4用紙1枚程度の量で要約メモを提出してもらい、動画視聴型の授業に慣れない学生が動画を単に聞き流すことのないよう留意しました。

●1回あたりの学習時間の想定

授業外学習時間として120分程度、授業時間として60分程度

●成績評価の方法

要約メモ、予習課題の状況、オンライン試験（授業支

援システムのテスト機能を用いた試験）により評価しました。

●その他の記載

私はこれまで、数学とは一人で学ぶものだと思っており予習とグループワークを組み合わせた反転授業の導入は考えたことはありませんでしたが、やってみると比較的うまく機能したように思います。柔軟に対応してくれた受講生に感謝します。今年度はTAを付けることができたため、Zoomの操作などで活躍してくれた点も恵まれていました。

以下、授業アンケートの自由記述に書かれていた受講生からの声をご紹介します。

- ・毎週、講義を受ける時間と考える時間を習慣づけることができたので、数学の力が伸びたと感じました。
- ・授業内でグループディスカッションがあることが良かったです。他の教科の課題についてもこの授業で受講者に聞く機会があるということで不安も減りました。
- ・数少ない生徒同士の交流ができる授業形態で、学生の心身の健康の維持に大きな役割を果たしていたように思う。オンデマンドの予習は大変だったが、予習の進める度合いも生徒がある程度自由に決めることができ、課題過多の状況においてはすごく有難かった。受講生たちは私の想定よりかなり多くの時間をかけて学習していたようで、好事例といえるか分かりませんが何かのご参考になれば幸いです。

Good Practice Case 7

田島 祐規子教授

国際戦略推進機構英語教育部
 (研究分野: TESOL、教養教育における英語教育、英語教材開発)

●科目名

英語Writing

●履修人数

クラス1 (23名)、クラス2 (22名)

●授業タイプ

オンデマンドとオンラインの併用型授業

オンデマンド・オンラインのいずれの場合も、パワーポイント資料を作成しました。

オンデマンドの場合は音声付きパワーポイント資料で、オンラインの場合も教員説明はパワーポイント資料を使って行いました。なお、オンデマンドの場合、各回のパワーポイント資料は授業開始までに授業支援システムにアップロードしていましたが、実際に学生が閲覧できるのは授業の開始時間から、としました(例: 3限の授業なら、13時00分から閲覧可能)。

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

- ①オンデマンドとZoomクラスの選択は、どちらのほう
が効果的に学習内容を説明できるかを考慮し選択
しました。結果的に、授業の二回目（再履修者も参加
可能）、各月の最初の授業、2つの主要なプロジェ
クト週の授業などがZoom授業となりました。尚、オン
デマンド授業の場合であっても、授業支援システムの
Q&Aに質問が入ったときに回答できるように待機し
ました。
- ②毎回のパワーポイント資料の最初に「今週の予定と課
題」を、最後に「来週の予定と課題」を必ず入れて、
一週間の課題目標が具体的に分かるようにしました。
併せて、授業用シラバスの授業計画欄に毎回の授業内
容を明記しました。
- ③Zoomクラスではブレイクアウトルームを使ってグ
ループ活動を数回行いました。一例として、Reading
の宿題になっていたWritingに関連する論文（一部）
の解釈について意見交換し、代表者が発表するよう
にしました。グループ活動の時には、可能ならば自分
の判断で顔を出すという申し合わせをしました（これは
好評でした）。
- ④授業支援システムの掲示板を使ってpeer editingを
するグループ活動を行いました。
投稿練習一回、2つのプロジェクトで2回、というこ
とで3回の添削活動で、グループメンバーが異なるよ
うに工夫しました。

火4 (22) Peer-review 練習(掲示板)

グループ名	A	B	C	D
1	5125	5053	5110	2045
2	4110	5056	5114	2087
3	5003	5081	5116	2129
4	5019	5084	5126	2144
5	5027	5089	5181	
6	5032	5108	5188	

5

・グループは1~7です。各グループに4名ずつ配置しています。

・Peer reviewの担当は以下の通りです。

AがBのPeer-reviewをする。
BがCのPeer-reviewをする。
CがDのPeer-reviewをする。
DがAのPeer-reviewをする。

◆グループ5 とグループ6は3名になります。

・Peer reviewの担当は以下の通りです。

AがBのPeer-reviewをする。
BがCのPeer-reviewをする。
CがAのPeer-reviewをする。

Peer editingの組み合わせ例
(授業支援システムの掲示板に実際に掲示したもの)

●1回あたりの学習時間の想定

授業時間として90分、授業外学習時間として90分（以上）

●成績評価の方法

教科書宿題・教員指示課題20点、教科書・授業資料
復習テスト20点、Project A（単数パラグラフ）20点、
Project B（5パラグラフのshort essay）30点

※成績評価は、最初から90点を満点としています。各
項目で特に秀でた場合には満点を超える点数をつけ
る（例：課題は3点満点だが、内容が良かったので4
点）、あるいは全体の最終評価で「優」を超えると認
められる場合に90点を超える「秀」と判断すると、学
生に初回授業で説明します。

●その他の記載

対面・遠隔に関わらず、しっかりと授業準備をして臨
むことが、やはり授業の原点かと再認識しました。また、
学生から質問が届いたら、できるだけ早く回答すること
で、対面ではないものの、学生とのコミュニケーション
が良くなったという実感を持ちました。

Good Practice Case 8

金 蘭美准教授

国際戦略推進機構日本語教育部
(研究分野：日本語教育)

●科目名

韓国事情

●履修人数

24名

●授業タイプ

- ・Zoomミーティングを利用した遠隔リアルタイム型で
実施しました。
- ・毎回、日韓の言語行動をテーマとした調査データを資
料として提供し、それについて受講者同士が話し合え
るようにブレイクアウトセッションを設けグループ
ワークを行いました。グループワークの際にはGoogle
スプレッドシートを使い記録を取るよう指示し、そ
れをグループのメンバー同士、また全体で共有し、最
後に教員のほうでフィードバックする形で行いま
した。
- ・授業の後は、当日のスライド（PDF）をGoogleドラ
イブやLMSにアップロードする形で配布することで、
復習や振り返りができるようにしました。
→LMSにアップロード：著作権にかかわる資料が含
まれていない場合。
→Googleドライブで共有：著作権にかかわる資料が
ある場合。閲覧可・ダウンロード不可の形で共有し
ました。

・授業のあとの振り返りについては、当日提供されたデータや資料に対する考察、新しい気づき、感想などをまとめる課題を課しました。また、LMSの掲示板を使い、その日わかったことや気づいたことを投稿してもらい、受講者同士によるフィードバックや意見交換ができるようにしました。

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

韓国語と日本語の言語行動の違いを理解し、その理由について受講者同士が意見交換をする中で学んでいく、というプロセスを一番大事に考えました。そのためには対面授業に近い形で行うことが必要だと思ったので、①受講者同士で意見交換ができる場を作る、②指示を明確に与える、受講者自身が授業の振り返りができるようにし、教員がフィードバックをする、ということを中心に授業設計を行いました。

●1回あたりの学習時間の想定

授業時間として90分、授業外学修時間として1時間ほどを想定しました。

●成績評価の方法

平常点（グループワークの記録など）、LMSを用いた課題の提出（掲示板への投稿、トピックごとに出される400字程度の考察）、Formsのテスト機能を用いた記述式期末試験により評価しました。

●その他の記載

本授業では、毎年韓国世宗大学校からの留学生（通称世宗プログラム生）に日韓文化比較をテーマとした調査結果を日本語で発表してもらい、日本人学生と交流する時間を設けてきました。今回はその活動はできなかったのですが、幸い、受講者に韓国人留学生が4名おり、グループ活動を通して日韓交流ができました。また、神奈川県教育院の方に依頼し、「韓国の教育」、「韓国の衣食住」、「韓国語_旅行会話」をテーマに3回特別講演を行っていただきました。オンライン上でも韓国人留学生と日本人学生が意見を交わせる場を作りたいと思っていたので、実現できてよかったと思っています。

Good Practice Case 9

為近 恵美教授

地域連携推進機構

（研究分野：応用物理、総合工学、半導体、

シリコンフォトニクス、バイオセンサ）

●科目名

「研究開発論—大学・企業・イノベーション—」

●履修人数

22名

●授業タイプ

リアルタイムZoom（双方向）による講義。

PowerPointのプレゼン資料を画面共有してリアルタイムに講義を実施し、プレゼン資料等は、授業後に授業支援システムに掲載しました。最後の10分程度を使って、当日の講義に関する簡単なレポート（授業支援システムへの直接入力）を課しました。

また、講義時間の一部で、ブレイクアウトルーム（各4名まで）に分かれて、グループ討論も行いました（ブレイクアウトルーム内では、カメラオン・オフは学生任せ）。

●どのようなことを重視して授業の準備をしたか/授業の工夫

初回講義で、「この講義に期待すること」について授業支援システムのアンケート機能を使って記載してもらい、学生が何を求めているかを調査し、講義の端々でその内容に応えるようにしました。

講義が一方通行にならないように、学生に質問を投げかけ、手を挙げてもらうなどのリアクションを要求したり、投票機能を用いたりして、学生の参加を促しました。学生の発言時は、可能ならカメラオンにして発言してもらいました（拒否権有り）。

グループワークでは、オンラインであることを踏まえてグループの人数を最大4名と設定しました。

学生の意見を聞き、終了時のレポートのメスを遅めに設定するなど、学生が受講しやすいように工夫した他、リモートで孤立している学生と少しでも双方向にやり取りができるようにしました。

●1回あたりの学習時間の想定

授業時間90分に加えて、レポート課題やグループワークのための予習・資料作成などを含め平均して45分程度。なお、予習に関しては、「次回までにこれをやってきて下さい」と具体的に課題を提示するのではなく、「次回は、**についてグループ討論してもらおうので、あらかじめ調べたり考えたりして意見が言えるにしておきましょう」というように、次回の講義内容やグループ討論のテーマについて伝える程度に留め、どれくらい準備するかはあくまでも学生の主体性に任せる形にしました。

●成績評価の方法

最終課題レポート（事前におおよその課題を提示し、第14回の講義時において作成）60%、それ以外には、毎回のレポートやグループワークでの発表内容、講義への積極性などを考慮（合せて40%）。

●その他の記載

良かった点について聞いた中で、学生同士のコミュニケーションの機会が多かったことを挙げていた学生が多数いました。今後も、学生の状況を見ながら工夫していきたいと思っています。

コロナ禍転じて福と為す

都市科学部都市基盤学科2年 長 洋平

はじめに

「2020年は何もできない間に終わったね。」

3月ごろから学生の間で交わされ、同意を得られてきた言葉であるが、ここには感染防止のための慣れない生活による疲労感と、貴重な学生経験の機会を喪失した無力感が背景に見える。つまり、我々の中で多くのことが変わっていき、多くのことができなかったと感じた一年間であったということである。しかし、大学生にとって失われてしまったような一年は、これからの働きでまだ取り返すことができるのではないか。コロナ禍を、うまくいっていたはずの生活を破壊した災いではなく、未来をより良いものにするきっかけとして捉え直すために、この一年間を見つめ直すことが必要である。

学生の心境の変化

ここでは大学生の生活面と学習面の変化を、筆者の経験や他学生の話をもとに紹介していく。昨年8月に横国生を対象にネット上でアンケートを実施し、400人弱の回答を集めた（長洋平, 2020）が、こちらも参考にしながら、2021年現在の学生の心境の変化を考察しながらまとめる。

1. 生活面での変化

まず生活面に関しては、感染拡大のリスクと私生活の充実のためのリターンの割合が、学生ごとに異なるという印象を受ける。8月のアンケート中の「外出して、誰かと話す頻度は？」という設問に対しては、1/3の学生が3日に1回以上の頻度であった一方で、同じく1/3の学生がほとんど外出して会話をしないという結果が得られた。加えて、現在の大学生の持つ危機管理についての共通認識を、誤解を恐れずに述べるとすれば、「2,3人で会うことは問題ない」、「一定数（個人差あるが5,6人ぐらいであろうか）以上の集まりは控える」、「必要以上に集会の様子をSNSに投稿しない」などが挙げられる。このように、同居人の有無や危機意識の差異も影響しながら、世間で言う「自粛しない大学生」と「孤独な大学生」はどちらも一定数存在し、大学生の生活をどちらか一方に断ってしまうことはできない。今も大学生は、コロナの感染拡大を防ぎたい社会と、成長機会や人

間関係を求める個人の間で大きく揺れている。

さらに生活面の興味深い変化を挙げるとすれば、学生の中でSNSを利用する者の割合が増加したことである。他学生との意見交換、情報収集、暇つぶし、不満の吐口などさまざまな目的のために、時には複数のアカウントを所持して、InstagramやTwitterを活用している。また、大学教員や学務部によるSNSの情報発信もこの利用者増加に一役買っている。こうした流れによって、情報がより早く共有されている一方で、情報格差が生じている危険が感じられる。

2. 学習面での変化

学習面での変化は全て、授業のオンライン実施と大学施設の原則利用禁止に帰することができる。この2点はほぼ同義であるようだが、前者が学習方法の変化の要因、後者を情報伝達手段の変化の要因として、別個に述べていく。

オンライン授業は、大学での学習そのものに多くの疑問や発見を投げかけたのは言うまでもない。興味深い例として、12月実施のFDフォーラムでは、数名の教員からオンライン授業になってから学生の積極性が向上したという意見が挙げられた。チャット機能や課題評価、中にはビジネス向けのツールを活用して授業参加の新たな方法を導入することで、学生の意識が変化したと考えられる。教育学者の内田樹氏は「教育弱者を呼び戻すための装置」という言葉を使い、この現状にも思わぬ成功があったと評している（内田樹, 2021）。その一方で、社会学者の吉見俊哉氏はオンデマンド配信は「本の飛ばし読み」として疑問を投げかけている（毎日新聞, 2020）。両者含め、多くの知識人たちが、授業のオンライン化をきっかけに活発な教育論を重ねている。もしこれが、対面授業へ戻していく過程で忘れ去られてしまうのであれば、それは非常に惜しまれるべきことであり、何らかの進歩を、この大学でも形として残すことが必要なのではないか。

さらに、オンライン授業によって、多くのソフトウェアやインターネットサービスが半ば強制的に利用されるようになった。大学の授業でこうしたツールを活用することの有用性が言われていたものの、コロナ以前まではその実現が検討されてこなかったのではないか。そうした中で、今やほとんどの授業がオンデマンド動画、もしくはZoomのライブ授業が実際に行われるようになって

しまった。こうした変化は不可逆で、大学の諸活動に影響を残していくだろうし、残していくべきだと考えられる。学校教育過程と労働社会の中間に位置する大学という機関の中では、目上の人とのメールや論文の書き方や関係企業や研究室とのコミュニケーション方法などの社会で要請される能力の習得が求められる。このように今後はMicrosoft Officeのソフトウェアのみならず、zoomなどのインターネットサービスやプログラミングのリテラシーまでもが、大学で学んでおくべき要素になるかもしれない。学生の個人PC購入が必須にもなったが、adobeなどのライセンス配布や、会議室へのzoom rooms導入など、情報設備の充実に関して、大学からの支援も必要なのではないか。「横国出て、こんなソフトも使えないの？」などと言われないように、学生（さらには教職員）のスキルの底上げに努めるべきである。

オンライン授業と敢えて区別して、大学施設の利用禁止による影響についてまず言えるのが、学生に対する情報伝達手段の変化である。いわば大学が全てパソコンとスマートフォンに凝縮されてしまったことで、立ち話や学内掲示板などから偶然得られる情報や、他者との何気ない交流などがたち消えてしまい、どこかつまらない雰囲気から抜け出せなかった。教職員や一部の学生からは、この状況の中でもさまざまな機会が提供されていたものの、それらの情報があるメールやLMSの投稿はどうしても埋もれてしまい、先に述べたように生活面の苦労がある学生らは特に、想定以上の反応が得られなかったのではないかと感じる。しかし、こうした情報共有の限界が感じられる現在に対して、今後再び大学に通えるようになったとき、有用な情報共有の手段の一つとして、LMSやYNUメールがコロナ以前よりも活用される可能性も一方で感じられる。

また、大学に通わないことで、教職員と学生との間のディスコミュニケーションが顕在化した。学生側の意見が不透明でまとまらなかったことで、この一年で大学側からサポートの姿勢がとられていたものの、それがニーズに合わせきれなかったと言えるのではないかと。それだけでなく、学生が就職や院進などの悩みの相談ができなかったという声も聞かれている。しかし、これは学生側の問題でもあり、今後は学生同士から積極的に連携して意見を交換して統合していく必要がある。

コロナ禍はより良い未来創造のための転換点

ここまで挙げられたのはいずれも、ここ一年間の議論で既に触れられたものばかりであった。だが、この難しい状況から現状復帰させることに必死で、誰もが大学そのものを更に良くしていくところまで考えられなかったのではないかと。コロナウイルスの感染拡大に限らず、これまで様々な現代の大学を取り巻く問題は取り上げられてきた。ここで、学生含め大学関係者が同じ問題に悩まされている現在を転換点として、今後の更なる課題解決へ繋げていくべきだと思う。「何もできない間に終わった」2020年に価値を与えるのは、これからの働きにかかっているのではないかと。

引用文献

- 長洋平. (2020年8月8日). 横国コロナアンケート「横国生の『新しい生活様式』を考える」報告レポート. 参照先: Yokohama Univer-City: <https://104scape.wixsite.com/yokohama-univer-city/post/横国コロナアンケート「横国生の『新しい生活様式』を考える」—報告レポート>
- 内田樹. (2021年2月21日). コロナが学校教育に問いかけたこと. 参照先: 内田樹の研究室: http://blog.tatsuru.com/2021/02/21_0910.html
- 毎日新聞. (2020年12月6日). <教育編 インタビュー ③>吉見俊哉氏がオンライン化に警鐘「利点あるがレベルは低い」. 参照先: 毎日新聞: <https://mainichi.jp/articles/20201206/k00/00m/040/088000c>

※ [編集者注] 長さんは、2020年12月5日（土）に開催された第6回ヨコハマFDフォーラムで、本学の学生代表として「学生主導アンケートから見た生の声と、新しい学生生活についての提言」とのテーマで発表されました。



大学教育の質保証 ⑤

双方向ライブ型授業で「対面性」を追求する

大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、遠隔授業を余儀なくされ、私たち教職員は試行錯誤の連続でした。筆者はキャリア教育担当として、Zoomを活用した双方向ライブ型授業を実施し、できる限り対面に近い授業運営を心がけました。今回はそれらの取り組みと、学生たちの受け止めについて報告します。

双方向ライブ授業で工夫したこと

筆者が担当するのは全学教育の5科目で、履修者数は各30～40名です。キャリア教育科目は知識の付与よりも、キャリア形成に係わる諸課題を「我がこと」として考える機会を履修生に提供することが肝要ですので、かねてより対話からの学びを重視し、ワークやディスカッションを多用する授業手法でした。また毎回、授業終了後は授業支援システムのアンケート機能を利用して、小レポート（授業からの気づき：400字）と質問、授業の改善要望を収集し、次回授業でフィードバックしています。まず、双方向ライブ型授業で実施したことについて紹介します。

■ 開講時：受講上の約束を周知・徹底する

Zoomを活用するにあたり、双方向性を担保するために、「顔出し」（ビデオ機能オン）を原則としました。顔出しは個人情報保護の観点でリスクが伴います。そこで、「受講に関する約束事項」を第1回授業で提示し、理解と協力を求めています。定めた主なルールは以下の通りです。

- ・必要に応じて「バーチャル背景」を設定する
- ・録画・録音したり、スクリーンショットを取らない
- ・第三者が視聴できる環境で視聴しない

■ 授業導入部：双方向性を意識させる

担当5科目で共通して実施している導入部を紹介します。

①Zoomにサインインしたらチャットに一言

授業開始5分前にサインインすることを推奨し、サインインしたら「今の気持ち」を一言、チャットで入力させます。「さっき起きたばかりです」「今日は晴天で気持ちがいい」「課題に追われて寝不足」など、思い思いのコメントが寄せられます。これは学生に授業に臨む心がまえをってもらう作業であり、出席票代わりに学生の様子を知る手段でもあります。この時点ではビデオ、マイ

クともにオフです。

②授業開始：まず声を出させる

開始時間になったら、ビデオ、マイクをオンにさせ、全員で「今日もよろしくお願いします」など、挨拶します。オンライン上で発言するのは勇気がいります。先ず声を出すことで、発言する授業であることを意識させます。

③最初の5～10分：フィードバックする

①のチャットをネタに軽く雑談してから、前回授業の復習もかねて小レポートや質問にフィードバックします。いくつか主要なものを取り上げる程度です。ネガティブ意見には必ず回答し、逃げないことを示します。改善できることはすぐ改善します。春学期の学生プロフィールでは、教員からのフィードバックの少なさが改善課題として挙がりました。全てに回答しなくても要所を押さえれば、そうした不満には繋がらないのではないのでしょうか。

以降、チャット機能は極力使いません。質問や意見があれば、対面の時と同様、発言するように促しています。チャットを活用すると学生からの質問等が活発になると言われますが、SNS的やり取りに慣れすぎて対面でのコミュニケーションを避けるようになっては本末転倒と考えます。

■ 授業：無理なく集中できるように構成する

たとえ興味のある内容でも、90分PC画面を見つめて授業を聴講するのは相当しんどいですので、配慮が必要です。

講義とワークを交互に配置する

各回の授業は2～3のパートに分けて、各パートは受動的に聴く時間と能動的に作業する時間（問題を解く、議論する等）を組み合わせます。たとえば、1つのパートを講義15分+次項で述べるワーク15分で構成します。

また、教員のPC画面は履修生をできるだけ多く表示できるようにします。対面の教室のような空気感は感じられませんが、多少なりとも履修生の反応が窺えます。



休憩、気分転換の時間を設ける

目の疲れや集中力の途切れを訴える履修生は少なくありません。休憩時間（3分）を1回設け、ビデオをオフにして席を立てて体をほぐすよう促しています。

春学期の担当科目は新生対象でした。大学のキャンパス風景をスマホで撮影し、1分ほどのビデオクリップにして流し、気分転換を図ったりもしました。

■ ワーク類：段階を踏んで参加しやすくする

オンライン上では、お互いの感情が読み取りにくく、発言のタイミングもつかみにくいです。発言者が偏ったり、全員沈黙にならないよう、以下のような手順を進めています。

①個人ワーク：まず、自分の考えをまとめる

個人で考える時間を3分程度設け、議論するテーマに関して話すことをまとめさせます。教員は、この間にブレイクアウトルームに分ける準備をします。

②グループワーク：進行の仕方を指示する

自分の考えはまとまっても、いざグループに分かれると発言のきっかけが掴みにくいようです。まず順番に全員が意見を述べてからその先は自由に発言するよう指定したり、グループ内で持ち回りで司会進行させたりします。

テーマによって、グループに分かれる前に投票機能を使って、賛成/反対など選ばせます。議論の際、「私は〇〇を選択した、その理由は…」というパターンで話すよう指示することで、発言が苦手な履修生も発言しやすくなります。

グループワーク中、教員は各グループを巡回（状況を見守る）します。教員の顔が画面に現れると、履修生たちは身構えてしまいますので、ビデオはオフにしています。

③全体シェア：段階を踏んで発言を促す

ワーク後の全体シェアの際、全員に意見を求めても、対面の教室以上に履修生はなかなか発言してくれません。意見がないわけではなく、発言のきっかけが掴めないだけですので、最初は教員が指名します。数回、授業回が進んだら、グループを指名して代表者に発言を促します。さらに数回、授業回が進んだら、指名はせずクラス全体に呼びかけ発言を待つようにします。段階を踏んで進めると、自発的に発言してくれるようになることが多いです。

履修生の授業評価、受け止め

期末に全学で実施する授業アンケートの結果は、担当5科目の総合満足度が3.7~3.8で、対面時とそんな結果でした。自由記述の主なコメントは以下の通りです。

- 徹底して双方向にこだわっているのが刺激的で充実
- 教員からフィードバックが毎回あり、議論の場が2回は必ずあり、モチベーションにつながった
- 最初は抵抗があったが、顔出しすることで受講生の態度や意欲が他の授業に比べてよかった
- ディスカッションは、相手を察するのが難しく、初めは話しにくかったが、段々話せるようになった

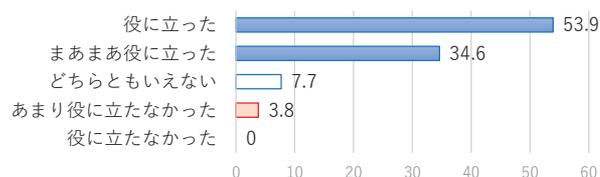
双方向ライブ授業で筆者がしてきたことは、対面授業で実践していたアクティブ・ラーニングの手法を、Zoom用にアレンジしたにすぎません。オンラインの特性を活かし、対面とは違う次元の授業手法を模索する動きがあり、それも一理あります。しかし、特別なことをしなくても、授業の質は保てるのではないのでしょうか。

以降、秋学期の科目「グローバル化と日本人」で独自に採った終講時アンケート結果を紹介します。

■ 課題負担：適量で役立つ課題なら有効

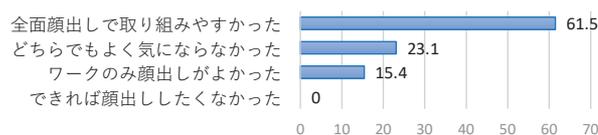
遠隔授業になり、課題の負担が多くなったことが問題になっていますが、当該科目では小レポート（1時間程度で書ける）を毎回課しています。その役立ち度は下図の通りで、9割近くが役立ったと回答しています。

自由回答には「授業が記憶に残りやすい上に新たな考えも生まれる」「(フィードバックの際) 他者のコメントを読んで理解が深まった」とありました。なお、本科目の授業外学修の週平均は1.2時間でした。新たなリサーチの必要がなく、授業を振り返り考えをまとめる程度の課題で、かつフィードバックもあれば、毎回課しても大きな負担にならず、学びの定着・深化に役立つということでしょう。



■ 顔出しの是非：授業形態で判断すべき

原則、顔出しで授業を進めたことについて、履修生の反応は下図の通りです。加えて、今後も遠隔授業が続く場合、顔出しすべきか訊いたところ、受講者数や授業形態（講義中心・双方向）により判断すべきが84.6%を占めました。



「お互い顔が見えるほうが積極的に参加できる」とのコメントに代表されるように、双方向のやり取りが多い授業では、相手が見えるほうが、仲間意識や信頼関係を醸成しやすく話しやすくなります。

一方、履修人数が多くなると通信が重くなるなどの意見もありました。実際、約3割の履修生が通信障害を経験していました。幸い、ビデオをオフにする、アクセスし直す、受講する部屋を変える等により、大きな支障は出ませんでした。学生たちの様々な科目の受講体験を総合すると（通信環境によりますが）、50名以下なら顔出ししても支障はなく、100名以上では通信障害が起きやすいようです。

CENTER NEWS

開催報告 2020年度 横浜4大学 第6回ヨコハマFDフォーラム

2020年12月5日（土）、オンライン（Zoom）にて第6回ヨコハマFDフォーラムが開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響で全国的にオンライン授業が導入されて半年以上が経ち、横浜市内4大学（神奈川大学、関東学院大学、横浜市立大学、および本学）でのそれぞれの経験や知見を共有すべく、「横浜4大学におけるオンライン授業の実施状況・課題・展望 ～学生とともに考えるウィズ&ポストコロナの大学授業～」とのテーマのもと、100名近い全国の大学関係者（教職員・学生）がオンライン上で集いました。

第1部（参加者98名）では、4大学からそれぞれ代表の教員、学生が登壇して実践報告を行いました。本学からは高大接続・全学教育推進センターの安野 舞子准教授が「学生・教員アンケート結果に基づく春学期オンライン授業の実態と課題」とのテーマで、都市科学部2年生の長 洋平さんが「学生主導アンケートから見えた生の声と、新しい学生生活についての提言」とのテーマで発表を行いました（本誌には長さんの寄稿文が掲載されています）。

第2部（参加者35名）では、Zoomのブレイクアウトルームを使って教職員・学生が混合する4～5名のグループに分かれ、オンライン授業についての自身の経験や考え、課題などについて意見交換を行いました。事後アンケートに寄せられた「他大学の状況を知り、問題点はやはり共通していることが確認でき、解決の糸口も得られたように思う。」「学生さんもグループワークに入っていたため、教職員と学生の問題意識の差を確認することができました。」といった声に代表されるように、各グループで活発な話し合いが展開されました。

次年度（2021年）は本学が幹事校となります。このフォーラムは、従来より対面で開催されてまいりましたが、2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のためオンラインでの開催となりました。2021年度の開催方法は現時点で未定ですが、これまで行われてきた6回のフォーラムの実績を踏まえ、活発な議論のできる実り多いFD研修の場を創り上げたいと思っています。例年にない本学からの教職員・学生の皆さまのご参加、どうぞ宜しくお願いいたします。

— 高大センターからのお知らせ —

学生IR、FD活動の報告書類の公開

春学生の学修・生活行動の分析結果や卒業・就職先調査結果など、各種学生IRおよびFD関連の情報は、関連する会議体や教授会でのFDセミナーにおいて報告しておりますが、よりタイムリーに関係各部局に展開すべく、サイボーズ内に公開フォルダを設け、関係各部局にて適宜参照・入手できるようにしています。必要に応じて学生サポートや教育改善にご活用ください。

■ 格納先：サイボーズ > ファイル管理 > 高大接続・全学教育推進センター

■ 提供文書の取り扱い：学内限定公開（本学教職員のみ）を含みます。学内限定公開文書のダウンロード後の取り扱いについてはご配慮ください。

